

【優秀賞】

着物の思い出

浅野憲治・愛知県

妹が六十二歳の誕生日を迎えることなく死亡した。乳癌がリンパに転移し、身体中に癌が発症し、手術することもなく死亡した。妹の遺体には、納棺の際、その夫と一人息子の手により、二十歳の成人式に着た黒地にリンドウの花が咲き乱れている着物が着せられた。この着物を買うために、両親も妹も兄弟も大変な思いをしたことを私は思い出していた。

通夜。残された兄弟五人は、誰もが、あのリンドウの着物のことを覚えていた。長女は「あの着物を着て、最後の旅に出ることが出来るなんて、幸せかもしれないね」と、感慨深げにつぶやいた。その言葉がきっかけとなり、次女が

「あの着物を買いに行つた時のことを覚えている」と、記憶を呼び起すよう、全員に促した。

「あれは、名古屋の百貨店のB反市で買ったものよ。私も行つたよ」長女は、はつきりと思い出したようであつた。

「昔は、B反市で着物を買うことも出来ないくらい、貧しかったのよね」と、同意を求めて來た。

「成人式ぐらい、着物を着せて出席させたいものだ」と、両親は、夜遅くまで話し合つていた。当時、父と母は、自宅で小さな織物工場を共働きで動かしていた。朝早くから夜遅くまで、一日中織機を動かし、六人の子供の子育てに時間を割くことも出来ないほど働いていたが、一番下の妹が二十歳になる頃には、ようやく子育ての苦労から解放される時期になつっていた。だから

「成人式ぐらい着物を着せてやりたい」と、願うようになつた訳である。しかし、着物を買うほどの蓄えがないことは、痛いほど妹自身にも他の兄弟たちにも分かつていて。(この子だけは、振袖を着た姿を見たい) という両親の願いが実現することを、兄弟も望んでいた。二人の姉たちは、普段着で成人式に出席し、悲しい思いをしていたから、その願いは切実なものであつた。

昭和も四十五年頃になると、成人式に出席する女性は、華やかな振袖姿であることが普通のことになつていて。そこにワンピース姿で出席することは、出席する本人ばかりか、親も兄弟も、非常な劣等感を持つことになる。着る着物の用意が出来ないからと言つて、欠席することは、生涯の消せない思い出になつてしまふ。だから、上の姉たちは、真新しいワンピースを用意して、同級生の目を気にして、精神的には、相当無理をして成人式に出席していた。その思いを、最後の兄弟である妹にはさせたくないと思つていたのであ

る。もちろん、私たち男の兄弟も、何とかしなければ、妹には内緒で話し合っていた。そして、家族会議となつた。

気持ちは一致していたが、両親は、妹だけを特別扱いをすることに遠慮していたし、兄弟も自分自身の生活に手一杯で話し合いは難航した。両親は疲れた目を拭きながら

「わしたちが、だらしがないから迷惑をかける」と、沈黙を破つた。両親の苦労を知つてゐる私たちは、沈黙を守つた。自分たちが働くようになり、働くことが大変であることを、嫌というほど実体験していたからである。

「各自、どれほどの負担が出来るか、申し出ることにしよう。そうすれば、目安も立てやすいし」と、長男が音頭を取り、話し合いが始まつた。決して高額では無かつたが、全員が、ギリギリの金額を提示した。

「これだけあれば、なんとかなるのかも知れない」という結論が、長い話し合いの結果出された。

着付け代は妹自身が負担する。一番金額がかさむと思われる振袖は、兄弟五人が買う。そして、帯や付属品は、両親が購入することに決まつたのは明け方近くであつた。二人の姉が、兄弟を代表して、いわゆるB反物と言われるワケありの着物を名古屋の百貨店まで、わざわざ出掛け、安く購入してきた。それが黒地にリンドウの花が咲き乱れている着物であつた。華やかさの中にも気品と落ち着きがあり、これなら誰と比べてもひけは取らないと思われた。

成人式当日、妹は、家族全員の協力で購入した振袖を着て、帯を締め、笑顔で家を出、笑顔で帰つて來た。帰宅した妹を囲み、全員で正月と同じくらいのごちそうを用意して、祝つたことを覚えている。

「本当に、あの時は、何か重大な使命を果たしたような気になつたものだつた」と、長男も、当時を思い出しながら、通夜料理に箸をつけた。

その妹は、あの時、家族全員で用意した着物を着て、両親のもとへ、兄弟では最初の二度と目覚めない旅に出た。